

時空保護隊ツァイトリッター

第4話 バカボン世界と灼熱のメリークリスマスなのです

「なのなのな、なのなのな、なのなのな、なのなのな」

なのメカたちが紙箱を使ってそり遊びをしている。トナカイ役は両側の細い髪束をひょいと上に向け、トナカイの角に見立てている。

「ずいぶん季節外れねえ」

フェイトは笑った。小惑星の居住区域に四季はないが、ミッドチルダ暦では夏である。なのメカたちが歌っているのは、「ジングルベル」だった。もともとこれはそり遊びの歌で、キリスト教の歌ではないから、地球から持ち込まれたまま冬の歌として知られている。

ラインの量産も終わって、いまはラインたちが整備と出動の当番。なのメカは自分たちの整備点検に入っている。

「フェレット、女体いじりは進んでるか」

「ひ、人聞きが悪いじゃないですかっ」

クロノはふふんと笑った。

はやては主にリッターアルフの整備をしているから、なのメカは交代で自分たちの定期点検作業を行っている。あとではやてがサマリーを見て、気になるメカだけを精査するのだ。ユーノは異常が報告されたら通訳するが、何も起こらなければ仕事はない。

「おにいちゃんもやりたい? 女体いじり」

「ば、ばかをいえっ」

今度はフェイトがふふんと笑った。控えめな警告音が鳴り、コンソールに情報が流れ始める。フェイトはエイミィの定位置に着席すると、着陸手順を開始した。当のエイミィが宇宙船に乗って帰ってくるのだから仕方がない。リンディも一緒だった。

「整備員を増員して、整備対象まで増やしたら、いたちごっこじゃないですか」

「だって欲しかったんだもん」

クロノの控えめな抗議に、リンディはすねて見せた。

「非武装だし、大きい船じゃないから、整備も出来合いのシステムで済むし」

「TST ドライブ、つけたんでしょ」

「…」

「つけたんでしょ」

「…ちょっとだけ」

「つけたんじゃないですかっ」

時間と多元宇宙を飛び越える TST ドライブは、出回ってはいるがそれは違法取引で、当然禁制品である。リンディの過去のつてで、当局のお目こぼしをもらっているのだが、とにかく出来合いの自動整備システムで TST ドライブの保守はできない。

「だって、机の前で電話番って、つまないんだもん」

「電話なんか来ないでしょっ」

「とにかく現場に行きたいのっ」

新しい船は、リンディとエイミィが現場近くに行くための指揮船である。

「えっらいまた、速い船やなあ。何やこのノーマルドライブは」

いつの間にか格納庫から上がってきたはやてが、定格表を見てうなった。

「非武装なんだし、逃げ足が速くないとねっ」

「母さん、追っかけるつもりですね」

「…」

「追っかけるつもりでしょっ」

「…ちょっとだけ」

リンディは身をすくめて笑った。クロノは、声の調子を落とした。

「母さん、僕はもう、いやですからね」

「なにが？」

「無茶しないでください。父さんみたいに」

「…ありがとう」

リンディの物腰からも、はしゃいだ様子が消えた。

管理局の任務中に落命したクロノの父クライドは、いつも家族の心にいた。家族の誰一人としてその死に責任はないのに、家族のそれぞれが、どこかそれにこだわっていた。

そして、プレシアのアジトから発せられた警報が、よどみかけた空気に割り込んだ。

「バカボンのパパとママって、名前はなんと言うの」

「不明です。家の表札にもバカボンとあるので、苗字もバカボンかもしれません」

今回のブリーフィングは現地で行われていた。エスティア号とリッターアルフが出動し、ユーノとなのメカはお休みである。

女学生のママと、バンカラ学生のパパが海岸を散歩している。結婚前のママとパパが描かれている唯一の回である。物陰からふたりをうかがうクロノとフェイトだが、いきなりパパが駆け寄ってきた。

「君たちはいったい何者なのだ。里中満智子先生のキャラなら、野球狂の詩(同じ週刊少年マガジンに隔週連載された水島新司の漫画で、里中満智子と共作した回がある)に帰るのだ」

「わ、わたしたちは怪しいものでは」

「怪しいのだ。何なのだ君たちの目は。バカボンの目もわしの目も点ひとつなのだ」

クロノとフェイトは互いの顔を見合わせ、沈黙した。ママも小走りに駆け寄ってきた。フェイトはおずおずと説明した。

「あ、あの、私たちの世界からこの世界の歴史を変えようとする人たちがいて、パパさん

とママさんの仲を、その」
「君たちはだまされているのだ」

パパはきっぱりと言った。

「この世界の歴史は、毎週変わっているのだ。歴史の邪魔をするなど、無駄なのだ」
「おーい、せんぱーい」

いきなり上空から、コップ状のシンプルな機械が飛来して、タラップ付きのドアが開くと、若い男が顔を出した。

「あーっ、お前は忘れようとしても思い出せない、バカ田大学時間航行部の五十嵐」
「ちょっと恐竜時代に行ったら、帰ってくるまでに連載終わっちゃって。あーっ、ラブトルちゃん、出ちゃだめーっ」

小型の恐竜がタラップから走り出てきた。

「チェーン・バインド!」

クロノとフェイトはデバイスを出す暇もなく、恐竜を地面につなぎ止めた。

「君たち、横山光輝先生の超能力者なのか」
「いや、ちょっとそれも違ってて」
「とにかく、なのだ。わしとママはすでにコミックス7巻分の人生を重ねている(このエピソードはKCコミックス「天才バカボン」第8巻所収)のだ。これからどんな回があっても、わたらの愛は変わらないのだ。アベックベックなのだ」

ママは諦めたようにうつむくと、パパの手を取った。

「そうよね」

エステシア号では、リンディが一言も発さず、成り行きを見守っていた。リンディは自分に息を吹きかけるように、低く言った。

「やられたかな。エイミィ、本部の状況は」
「異常なし。あ、接近中の飛行物体あり」

警報は本部でも鳴り響いていた。

「なののっ。なのなのっ」
「だめだよ、セブンティーン。いつもの調子で出撃はできないよ」

ユーノになだめられて、17号は肩を震わせた。

ミッドチルダの版図内である以上、火器・魔法による私闘は重罪である。ましてご法度装備のオンパレードである本部を当局の注目にはさせない。地下壕へのゲートを開いたユーノを、第2小隊長の52号が小声で呼び止めた。なにか考えがあるようだ。

「なーの、なーの」

「偽指令にきれいに引っかかってくれたねえ」

プレシアはデバイスを振るって、宇宙船の船倉から出した岩石群を慎重にコースに乗せた。人口重力の影響から離れた岩は、拘束力と万有引力だけで結合した状態となり、時折崩壊する岩が目につく。

プレシアもミッドチルダ世界で目立つ事件を起こして、自分への追求を厳しくしたくない。隕石群をたたきつけて、魔力使用者の特定を防ぐ腹だった。アリシアにはリニスをつけ、念のためにアリバイを作らせている。

しかし52号が予期したことは、まさにそれだった。直接戦闘はプレシアも避ける、と踏んだのだ。

なのメカたちは、本部の上空にディレイドラウンドシールドを次々と展開した。岩が近づくとラウンドシールドが実体化し、簡単に跳ね飛ばされるが、そのとき岩の方向が狂う。本部のある小惑星クライド同様、恒星の周りに楕円軌道を得るもの、そのまま恒星系を飛び出すもの、様々である。飛行方向が本部目掛けて重なり合っているために、周囲の隕石に衝突するものもある。

「まだチビさんたちがいたのかい。だが、本命を受けきれるかねえ」

すでに帰路につき、スクリーンの前で様子をうかがいながら、プレシアは不敵に笑った。

隕石の多くは、原始太陽系で惑星になりきれなかった小片であり、雑多な成分が粒状に混ざっていて構造がもろい。しかしある程度大きくなった原始天体の上で鉄とニッケルが熔融し、他の天体の衝突などでそれが飛び散ると、硬い鉄隕石となる。

プレシアが投入したとって置きは、直径10メートルの鉄隕石で、重さは4000トンを超える。どう叩いても引っ張っても、なのメカたちでは軌道を変えられない。

なのメカたちは、本部の前に次々と降り立つと、デバイスのバレルを展開した。エクセリオンバスターでかすめるように隕石を撃ち、軌道をそらそうというのだ。小惑星クライドの引力加速度は、プレシアが与えた加速に比べてそれほど大きくないから、軌道がずれてくれればクライドへの落下は避けられよう。

冷却システムなしでの全力全開エクセリオンバスターは、なのメカの破壊につながる。だが逃げれば本部と一緒に、ユーノも失われる。ユーノはなのメカたちの強い気持ちを直接感じ取れたから、なのメカたちに逃げろといえなかった。

プレシアには事情は飲み込めなかったが、なのメカたちが体を張って本部を守ろうとしているのは、よくわかった。中の人間が脱出する余裕は与えたつもりだったプレシアは、罪悪感を吐き出すように、宇宙船のスクリーンに言った。

「逃げなよ、チビさん。なんで逃げないんだい」

音もなく、隕石が接近してくる。なのメカたちの射撃統制は、ユーノがやるしかなかった。クロノとフェイトは急いでいたが、間に合わないことは自分たちでわかっていたし、宇宙空間で魔法を使う手段もなかった。

「フェレット、いいか、はずすんじゃないぞ。大切な本部なんだからな」

「お兄ちゃん」

「撃てフェレット」

フェイトの控えめな制止も聞かず、クロノはユーノに発射を迫った。ユーノの心の荷物を半分持ってやろうとしているのは、フェイトにもわかっていた。

「なのなのな、なのなのな、なのなのな、なのなのな」

なのメカたちが、通信回線に「ジングルベル」の合唱を流し始めた。涼しい曲で冷却装置の代わりになるものでもない。号令しないなら自分たちでシンクロして勝手に撃っちゃうから、と言っているように、ユーノには聞こえた。すでにエネルギーの充填が始まり、なのメカたちの白いバリアジャケットがほんのりとピンク色に見えていた。

「なあ」

3号がユーノを呼んだ。ユーノが号令してもしなくても、彼女たちはビームを撃つ。最後にユーノの声を聞いたがっている。なのメカみんなが。

ユーノが呼吸を整えて、声を出そうとした、そのときだった。

ぐいつ、と不自然に隕石の軌道が曲がった。と同時に、小惑星クライド全体に強い揺れが走った。いや、「揺れ」ではない。エレベータが突然静止したときのような、急に慣性運動をさえぎられる感覚があった。誰かがクライドを足場にぐいつと踏ん張り、隕石を押し出したようだった。

「みんな、クライドの影に飛んで、放射冷却するんだ」

ユーノは叫んだ。大気のない空間で熱を逃がすには放射冷却しかない。恒星の光が当たっていない側に行けば、なのメカたちの熱が一方向的に放射され、凍りつくところではない低温が得られる。

プレシアは身をのけぞらせて、宇宙船のシートに身を沈めた。事態の説明はひとつしか思いつかなかった。そしてその説明は操縦席脇で、最初はぼんやりと、次第に正確な輪郭を取って、プレシアの前に現れた。

夜天の書。

無言のにらみ合いは、夜天の書の低い声で破られた。

「おしおき」

プレシアの宇宙船は、もうもうと舞う七十七味とうがらしの粉末に満たされた。

「あーもうこら、業者さん呼んで軌道直してもらわんと」

はやてが情けない声を上げた。小惑星クライドの軌道は設定時と大きく狂い、ミッドチルダ標準時の倍数にあわせてあった自転周期がすっかり半端なものになっていた。

リンディはさっきから、じっと夜空を見上げている。

「夜天の書は、自分で頼んでおいて、プレシアの任務を失敗させたがっているみたいよね」
「内輪もめかな」
「そういう単純な理由だったら、いいんだけど」

リンディはフェイトとの会話を中断して、クロノやユーノを見た。なのメカの緊急損傷チェックに大忙しである。

「フェレット、1日に2回、女体いじりをする感想はどうだ」
「うるさいわっ」